

「#柏崎エール飯」ツイート企画

新潟産業大学 経済学部 文化経済学科3年 竹田 岳史 鈴木 白夜
指導教員 新潟産業大学 経済学部講師 権田 恭子

1. 「#柏崎エール飯」ツイート企画のきっかけ

(1) コロナ禍でこそこそできる地域連携活動を

文化経済学科権田ゼミナール（まちづくり・地方行政分野）では、これまで「まちかど研究室」をはじめとした地域連携活動の企画・運営、「たかだ竹あかりなど」の地域イベントへの参加など、様々な形で地域活動に携わり、柏崎地域の活性化を目指して精力的に活動してきた。だが今年度、新型コロナウイルス感染拡大という状況下において、これまでのように人々が集い、ふれあうイベントの企画・運営が困難になってしまった。大学の授業も春学期は全面的にオンラインでの実施となり、ゼミ生がリアルで集まって話し合いや作業をすることもできない。しかしこの状況下でも、“今だからこそ自分たちができる活動を続けていきたい”と考えたところ、「#柏崎エール飯」の存在を知り、この事業に学生なりの立場で関わることで、地域の飲食店のPR、以前から持つ地域の方との繋がり維持、新たな地域の方との繋がりからこれからの地域連携活動のあり方について、何か発見があるのではないかと考えた。



(2) 「#エール飯」とは

「#エール飯」とは、2020年3月に大分県別府市で“美味しい”はコロナに負けない”という合言葉とともに「#別府エール飯」としてスタートし、「お客様を呼びたくても呼べない飲食店」と「飲食店のメニューが食べたい・助けてあげたいけど行けない市民」を、テイクアウト促進を図り、支援しようとするものである。その後全国各地に広がっていき同時に多発的に「#エール飯」が始まった。

2. 「#柏崎エール飯」の事業展開

(1) 事業の始まり

「#柏崎エール飯」は別府エール飯から全国各地に広がっていった中で始まった事業のうちの一つである。「明るい柏崎計画（AKKプラス）」が柏崎観光協会などに事業企画を持ち込み、「柏崎商工会議所」、「柏崎観光協会」、「柏崎あきんど協議会」の市内3団体が共同主催、「明るい柏崎計画」協力という形で4月29日に始まった。基本的な支援の方法は別府エール飯と変わらないが、4月29日に協力店舗一覧の新聞の挟み込みとホームページ立ち上げを行い事業が始まった。事業開始当初は観光協会や商工会議所の会員の飲食店中心に80店ほどだったが、活動が広がるにつれて徐々に協力店は増えていき、10月末の観光協会へのヒアリング時点では、ピーク時には110店を超えるまでに拡大したとのことだった。

この事業では、飲食店はホームページ掲載に必要な情報（店舗名、住所、電話番号、営業時間、定休日など）を提供することでホームページ掲載が可能であり、随時協力店は更新されていくため、市民はホームページから飲食店を探し、そのまま問い合わせまでできるようになっている。一方、市民は協力店で商品を購入した際に「#柏崎エール飯」のタグをつけてSNSに投稿することで、この取り組み自体を広めていくことに繋げられる。この繰り返して市民へのテイクアウトの意識向上と市内の飲食店の収益確保を図るものである。



(2) 事業の展開

事業スタート後すぐに、柏崎市シルバー人材センターから有償ボランティアとしてテイクアウト代行という形で宅配のサポートを申し出があった。テイクアウトやデリバリーの経験がある飲食店は少なかつたため、このサポートはとても大きな手助けになったという。その後大和タクシーも同様の宅配サービスを行った。このように活動が広がっていく中で柏崎日報などにも取り上げてもらい、より認知度が上がっていったと考えられる。

5月の中旬からはフォンジェ 1階で「柏崎デリカショップ」が行われた。これは地域の飲食店 13 店の方々が交代で商品を持ち寄って販売を行うというもので、10 時半から 13 時までの予定で始まったが、連日大盛況となり午前中での完売が相次いだという。1 回目のデリカショップは 5 月末までとなったが、好評であったため 6 年半ばからと 6 月末からの各 1 週間ずつの計 3 回行われた。7 月に入り徐々に店に客足が戻り始めたのを実感し始め、デリカショップは終了となった。

6 月中旬から東京電力の発案で「#柏崎エール飯グルメチケット」が作られた。このグルメチケットは東電のプレゼント企画として贈呈されたり、商品を購入していただいた方へのノベルティとして配布されたりと活用された。同時期には「#新潟工科大学エール飯」が始まり、新潟工科大学の全学生を対象とし柏崎エール飯協力店で使える一人当たり 4,000 円分のグルメチケットが配布された。また一部店舗では学生証を提示することで割引などの特典が付くという企画だった。この二つの企画は 9 月 30 日をもって終了した。

(3) 今後の展望

11 月初めから柏崎エール飯の管理運営主体は最初に企画を持ち込んだ「明るい柏崎計画」に移ったという。運営体制は変わったが 2021 年 2 月現在もホームページなどでの活動は続いており、ネット上でのテイクアウト申し込み受付を始めるなど、今後の更なる展開が期待できる。また、平日は毎日 11 時半

から 13 時半まで市役所 1 階の売店で地元特産品や市役所職員向けのお弁当販売を行っている。柏崎市内ではある程度飲食店の客足は戻ってきているが、一方で、未だ宴会が避けられる傾向が残っているため、大人数の宴会場に強い店舗のサポートをどうするかという課題が残っているという。

3. 権田ゼミナールによる「#柏崎エール飯」企画

(1) ゼミナールとしての活動概要

私たちはこの企画を 5 年半ばにスタートし、7 年半ばまでの約 2 か月で市内の 13 店舗を回ることができた。13 店舗すべてでテイクアウト商品を購入し、自分たちの感想とともに店員の方のコメントや商品、店内の写真を添えて、以前から情報発信に活用していた「まちかど研究室（新潟産業大学権田ゼミ）」の Twitter アカウントに投稿した。

大学での対面授業が再開した 10 月末には、柏崎エール飯の運営主体である柏崎観光協会の飛田成雄さんに取材、12 月には最初の企画提案者で、11 月からは運営主体となった明るい柏崎計画の竹内一公さん、長沢智信さんを外部講師としてお招きし、事業が始まったきっかけや反響、今後の展望について伺った。

この「#柏崎エール飯」企画は今年度のゼミナールの中心的活动となり、学生制作の地域連携活動広報誌『ローカレッジ』の今年度号（vol.12）で特集しており、3 月完成予定である。



(2) 活動詳細

① エール飯協力店で商品を購入

毎週 1 回のゼミナールでの話し合いの中で飲食店をピックアップし、購入しに行く日時を決め、飲食店に電話予約を入れた。この際に商品や店内の様子

の写真撮影やツイートする許可をいただいた。密を避けるため、同時に店舗に行って購入するのは、2、3人とし、店員の方から地域に発信したいコメントを一言いただいた。購入した商品は広場などの解放的な場所や各自の部屋で味わった。

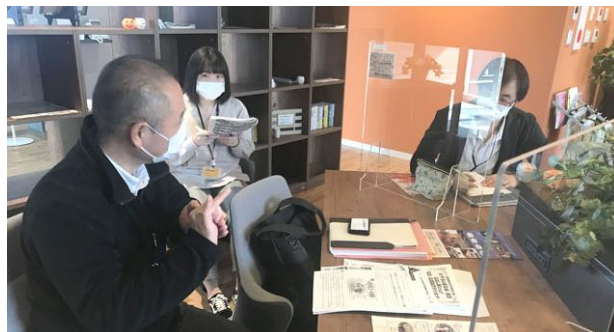
②Twitter で情報発信

自分たちの感想、店員の方のコメント、店の様子などからツイート内容をつくる。撮影した商品や店内の写真から使用する写真を選定し、「#柏崎エール飯」「#柏崎テイクアウト」の二つのタグを付けてツイートする。なお、最も多く見られたツイートでは6,500回以上のアクセスがあった。権田ゼミアカウムのフォロワーも約1.3倍に増え、飲食店の情報を発信することの反響の大きさに驚くと共に、学生の取り組みのPRにも繋がったと考える。



③柏崎観光協会、明るい柏崎計画へのヒアリング

10月末に柏崎観光協会の飛田さんにお話を伺った。そこでは柏崎エール飯のホームページや地域の方から得ていた情報だけでは得られなかった多くの新たなお話を聞くことができた。お話の中で柏崎エール飯が別府エール飯を基にして始まった企画であることや、観光協会や商工会の会員に飲食店の方が多いことから一見関係の薄そうな観光協会などが運営の中心を担っていることなど、とても興味深いお話を聞くことができた。そして企画提案者が明るい柏崎計画であることも教えていただき、12月に明るい柏崎計画からお二人を外部講師としてお招きして、今後の構想などのお話を伺うことができた。



④『ローカレッジ』にまとめる

権田ゼミナールでは毎年『ローカレッジ』という地域連携活動広報誌を発行している。産大生の地域連携活動を中心に採り上げ、学生が取材からデザインまでを手がけて制作、発行している。

今年度は「#柏崎エール飯」の活動を特集記事として採り上げた。記事をまとめるにあたり、誌面にする許可や数か月経過した現在の状況などを13店舗すべてに電話で再取材した。また商品を購入するためお伺いした際に、特に協力的だった「中華美食館」と「Café Confine」の2店舗についてはコロナ禍の経営状況やどのような取り組みをしたのかなどの追加インタビューを行った。なお、デザインソフトを用いた作業やヒアリングの際には、カシックス「K.Vivo」のスペースを適宜利用させていただいた。

4. 今年度の活動から来年度へ

今年度はコロナ禍という以前の常識が通用しない環境の中、地域の方々の「#柏崎エール飯」という事業に賛同し、ゼミナールとして活動をさせていただいた。これまでのような人と人との関わり方ができない中でも、地域の方は活動を応援してくださり、自分たちもささやかではあるが、地域の役に立っているという手応えを感じる事ができた。

来年度も先の見通せない状況が続くと思われるが、今年度1年間、手探りながらも地域の活性化に繋がる活動してきたことを忘れず、活動を止めることなく、続けていきたいと思う。自分たちが今できることと、地域に期待されていることを見据えて、これまでの形に捕らわれない活動を模索し、実行していきたい。今後も地域の方々には一層のご指導とご協力をよろしくお願いいたします。